

同年七月八日〜八月八日 二個中隊を第六師団歩兵連隊に配属、本部及二個中隊はムンダ海岸付近の陣地確保に任ず。

同年八月九日〜九月三十日 ムンダよりコロンバガラ島に転進、歩兵第十三連隊に配属、飛行場付近の陣地確保に任ず。

同年十月十五日〜十九年四月三十日 十月中旬ポーゲンビル島エレベントに復帰、部隊充員及整備同時に第九中隊二〇〇名と併合。

歩兵第十三連隊に配属シタロキナ作戦に参加、解散まで「マワレカ」―「ジャバ」海岸の防御戦闘に参加。

十九年六月一日 現地復員せるも、十九年七月まで現態勢のまま海岸防禦任務続行。

同年六月一日〜五日 第一回「マワレカ」「ジャバ」の戦闘に参加。

同年六月二十日前後 第二回「マワレカ」「ジャバ」の戦闘に参加。

解散後転属次の如し、歩兵第十三連隊（第六師

団熊本編成）二二九名、二十三連隊（都城編成）一四三名、歩兵第四十五連隊（鹿児島編成）一三名、その他九部隊 計五一八名 合計 九〇三名。

レンバン島多根岬

茨城県 猪 瀬 良 一

日本の無条件降伏を知ったのはマライ半島北端の町、スンゲーパタニーにあった第三陸軍病院分院であった。

マライ中部マラッカ海峡沿岸の町、ポートジクソン、シルサの南方軍下士官候補者隊（臨時に予備士官学校として使われた）を卒業した見習士官二百八十名と共にビルマ方面軍へ転属のため軍用列車で北上中、真性にチフスにかかり、タイ領ハヂャイの第四野戦病院に入院したが、昭和二十年四月十五日と記憶している。幸にも一命をとりとめたものの、容易には体力が回

復せず、病院の転進と共に、マライへ後送されてしまったわけである。

第三陸病では、何時でも退院出来る体になっていたが、転属先である森七九〇部隊司令部の所在が判明せず、心ならずも、ずるずると病院生活を送っていた。さて、軍医、衛生兵、独歩患者を整理させ、病院長が終戦に関する詔勅を奉読されたのは、八月十八日であった。私はその頃少尉に任官していたが、全快した兵科の将校が病院と行動を共にするわけにはいかない。院長から、第九四師団、歩兵第二五七連隊（乙守部隊）へ転属の命を受けた。この部隊は、スングレーパタニーから四十キロほど中央山脈寄りのスングレートパワシという町から、さらに四キロ位離れたゴム園の中に、ニッパハウスを建てて駐屯していた。私は連隊砲中隊へ配属され、私は大隊砲出身なので、一般歩兵科出の藤木少尉に代わって、第三小隊長を命ぜられた。

第一分隊長、常泉軍曹。第二分隊長、神山伍長。小隊の人員は小隊長他二十四名であった。小隊長といっても、これから戦闘があるわけではない。私の未熟な

指揮によって兵を死なすことはないにしても、これから先何年かかろうとも、彼等を無事に復員させるまでの責任の一端は、私の双肩にかかっていることを思うと、身がひきしまり、戦慄さえ覚えた。

部隊は、この駐屯地で、英国に武器、弾薬を引き渡すと、スングレーパタニーの飛行場跡へ他の部隊と共に集結させられた。そして十月四日「降伏閱兵式」なるものをやらされた。先ず大勢の印度兵が来て、下士官、兵の帯剣をはずさせ、それをロープに束ねて持ち去った。何の魂胆があるのか、将校は帯刀せよという。会場に行くとき帯剣が、閱兵台の両側にうす高く積まれていた。おびただししい量である。彼等は、我が方の編成、指揮系統等におかまいなく、下士官、兵を十列縦隊に並べさせた。

将校とはいえば、これまた序列も何もあったものではない。師団長も、我々へっばこ少尉も同列である。これは閱兵台に向かって、一列横隊に並べせられ、

「将校は右より一人ずつ閱兵台の前に進み出て、閱兵官に拳手の敬礼をせよ。次に軍刀をはずし、台の横に

いる兵隊に渡せ」と。

いよいよ屈辱の時間が始まる。我々の敬礼に対し、閩兵官は決して答礼をしない。我々の差し出す軍刀を傍にいたる英兵がひったくるように取り上げると地面にたたきつけて泥靴で踏みつけた。何と武士の魂をである。武士の情けで帯刀を許すなどと紳士的なことを言っておきながら、何が武士の情けだ。彼等はこの日の演出のために、軍刀を取り上げなかったのである。

ここにいる間、私は度々小隊を連れて使役に出された。小銃、機関銃等は一丁一丁大きいハンマーで壊させた。どうせ海の中へ棄てさせるのに、そんな手間暇をかけさせることもあるまい。この三八式を肩から落としただけで、兵隊は、どれほど酷しい制裁を甘受して来たことか。兵器はすべて、上御一人からの御下賜によるものであった。正に断腸の思いである。

ここに宿営中、脚気患者が続出した。腹六分位の米飯は給与されたが副食らしいものはほとんどない。スングートパワンでは、どうせ英軍に接收されてしまうものならと、大盤振舞をやって来たばかりなので、何

とも怪しい食事である。それでも虜囚の身とあっては致し方ないが、野菜を全く食わせないのには閉口した。脚気の原因は野菜を断たれたためだったのであろう。日本軍は、我が方の捕虜に対して肉を与えなかった。我々はその報復として野菜を与えない、ということだそうだが、それが事実だとしたら、何とたわいもない、単細胞的報復手段といわねばなるまい。

英軍の接收部隊は多くの脚気患者を出したばかりではない。程度の悪い印度兵により、腕時計を強奪させる者が多かった。まさかに舎内まで入っては来ないが、便所へ行く時を狙われた。「ウオッチ、ウオッチ」と言いながら、拳銃や自動小銃をつきつけるのである。時計は貴重品である。かといって命には替えられない。彼等も脅しただけで撃ちはしないが、それにしても暴発しない保証もなく、どんな気違いがいけないものでもない。命の危険に晒されているよりは、時計を諦めた方がよいというものである。兵隊達には、うるさく注意しているのだが、肌身放さず着ている大事なものである。うっかり外すのを忘れてこの難に遭う事にな

る。印度兵には、両手首に勝利品の時計を二つずつも嵌めて得意がっている阿呆が何人もいた。どうせ時間を読むことも満足に出来ない癖に、それが最高の文化人的スタイルとも思っているようだ。

十一月十三日、故郷では紅葉も散って、そろそろ木枯らしが吹き出す頃であろう。部隊はレンバン島へ集結のためこの収容所を後にして、二日後、レンガム七哩道標付近へ到着した。ここは、クルアン検問所を通過するための待合所というべきもので、先に通過して行った部隊が残して行ったニッパハウスがあり、宿泊には不自由はなかった。だが私は、他の中隊から加わった者を合わせ四十名を引き連れ、田村作業隊第二小隊長として、マラッカ海峡のピナン島に近い、アヒルヒタム採石場へ出発を命ぜられ中隊をはなれねばならなくなった。そして十二月十日、我々作業隊は他の部隊と交替になり、メンキポールの兵站宿舎に収容されることとなった。

この兵站宿舎は、ビルマ、タイ方面から南下して来た兵隊でこった返していた。二泊すると、再びレン

ガム七哩道標のニッパハウスへ移駐させられた。戻ってみると、我が乙守部隊は、我々作業隊を置き去りにして、最後の収容地レンバン島へ発ってしまった。本隊と離れてしまうこと程心細いものはない。ましてや今は占領軍の命令一つで何処へ持って行かれるかわからない根無草のようなものである。そして同月二十三日、第四十三梯団に加えられ、クルアン検問所に向かう。

マライ方面軍、ビルマ、タイ方面軍にして南下するおびただしい日本軍俘虜は、一人としてこの検問所を免れることは出来ない。検問は申すまでもなく戦犯容疑者を焙り出すためのものである。屠場へ追いやられる憐れな豚の如く、敗残兵は検問所のゲートに向かって長蛇の列をなした。検問所の周辺には、何箇所にも高い櫓が組まれ、その上には機関銃を据えた監視兵がいた。脱走する者あらば、容赦なく射殺する構えである。そればかりではない。自動小銃を腰だめに構えた印度兵がうろついている。それらの兵隊の中には、人目を掠めて時計を強奪する不埒な奴もいた。また、身

体検査で、貴金屬を持っていることが判ると厳罰に処せられるから、今のうちに正直に出せという。

検問に当たったのは、主として日系三世の将校らしく、将校、下士官に対しては特に入念な検問が行われた。私は戦歴も浅く身に覚えは無かったが、それでも容疑無しの白紙を渡された時はほっとした。また私の小隊で容疑ありの黒紙を渡された者は一人も無かった。

クルアン検問所を通過すると、梯団は無蓋貨車に積み込まれ一路南下を続けた。そして、思えば一年前、命からがら辿りつくや、決戦を期して勇躍後にしたシンガポールへ逆戻りしてしまったわけである。我々の隊列をみると「ナシマカン、ロコマカン」と言っていて、残飯や煙草を哀願していた華僑の子供達が、小憎らしい顔をして、軍票（南方開発券）を投げつける。相手が子供とも思っても腹が立つ。マライ人の子供達は決してそんなことはしなかった。日本の敗戦によって軍票は全く紙屑でしかなかったのである。シンガポールの埠頭から乗船するのが、これまた大変なことであった。

日本軍の整列隊形は通常四列縦隊で、長は列外に出るのが一般である。ところが乗船係の英軍将校は、十列縦隊に並べという。これでは末尾の端数が多くなる。それをかまわず詰めさせるのだから、編成も何もあつたものではない。その船の定員が三百名だとすると、一生涯命三十数えて、そこで切るのである。これでは、ある部隊に隊長が二名、ある部隊には隊長不在ということになりかねない。彼等の言うなりにしては、こちらの指揮系統は支離滅裂にされてしまう。彼等の前を通り過ぎてから元の編成に戻して乗船することにして事無きを得た。

船は大方二百〜三百名が限度の小型貨物船であった。元々日本海軍に就役していたものらしく、船員はすべて日本海軍の捕虜である。英軍の兵士は一人も乗っていない。目指すレンバン島にも、英軍は駐留していないというのを聞いてほっとする。一昼夜で、南レンバン島千鳥港へ着いた。千鳥港とは誠に優雅な名前をつけたものだが、港とは名ばかり。マングロープの生い繁る岸辺から五、六メートルほど、丸太を組んだ棧

橋が突き出ているだけのものに過ぎない。この港へ着いた船は二隻であったが、いくら小型の貨物船でも、丸太組の棧橋へつけることは出来ない。二隻の大発で運ぶのだから、五、六百名を上陸させるには半日もかかった。

レンバン島は赤道直下、スンダ列島に属するオランダ領とのことである。南北レンバン、ガラン、この三つの島が、川幅位の水道を隔てて近接している。我が小隊の行先は南レンバン島多根岬であった。私は二十三名の部下を率い、輸送指揮官から渡された地図を頼りに出発した。地図を見ると、島は出来そこないの南瓜に似ており、千鳥は、成り元をずれたあたりにあり、多根は、臍の部分に位置しているようである。多根へ行くには、島を横断せねばならない。距離は凡そ二十キロ位と思われた。島は概ね平坦で、標高百メートルかせいぜい百五十メートル位の山が幾つか見えている。兵達の足取りは軽い。丸腰なのだから身が軽いばかりではない。やっと原隊復帰出来る喜びと安心感が誰の顔からも読みとることが出来た。中央部に位置する

天王という宿営地まで来ると、何といっても赤道直下である。灼熱の太陽が頭上にあるのだから、大方の者がバテてきた。常泉軍曹を先頭に私が後尾について、落後者を出さぬよう気を配った。そしてやっと多根へ辿り着いたのは夕方になっていたと思う。

「第三小隊長猪瀬少尉以下二十五名、アヒルヒタム作業隊より、異状無く帰隊致しました」今井隊長に帰隊の申告をする。一名の事故も無く無事本隊へ復帰出来た安堵から、胸の奥に熱いものがこみ上げて来るのを覚えた。「長い間御苦労であった。全員無事で何よかったです。今夜はゆっくり休んでくれ」。

十二月二十七日、クルアン検問所を通過して五日目であった。次の朝、中隊長から呼び出しがあった。何事かと思っ行ってみると、農耕係将校をやれとの命令であった。私は二松学舎の繰り上げ卒業だが、中等学校は園芸学校であり農家の出身である。中隊で農業学校出の将校は君一人であり、帰隊するのを待っていたというのである。「中隊長殿こそ、農大出身ではありませんか」私が冗談のつもりで言うと、「勿論俺が

先頭に立ってやる。今の食糧支給の状態ではどうにもならん、一日も早く自給体制を確立せねば餓死してしまう。部隊本部としてもこれが最重要問題なのだ。こうしたわけで、君の帰隊を首を長くして待っていたのだ。本日より農耕係將校を命ずる。中隊の兵隊を生かすも殺すも君の双肩にかかっている。しつかり頼む」と隊長は悲壮な面持ちで私の肩をたたいた。帰隊早々私は、農家の倅、農学校出ということで、重大な責務を負わされることとなったのである。

開墾に適する平地は十分にあつた。英軍から支給された農具もどうにか間に合いそうである。開墾、整地、栽植、管理、収穫物の処分、すべて農耕係の責任であり権限であつた。中隊長は私の計画を全面的に支持し、他の將校達も先頭に立って働いた。そもそも農業は、焼畑農耕から始まつたという。二抱えもあるラワンの大木を伐り倒すには二、三日もかかる。次に密生している灌木やララン草を刈り払う。強烈な日射でたちまち枯れる。風向を見て火を放つ。

こうして焼き払った跡を、一畝一畝掘り起こす。一

反二反の畑を拓くの何日もかかりはしない。出来た畑にはその日の中に、タビオカや薩摩芋の苗を植える。一日早く植えれば、それだけ早く収穫出来る。我々のやつた農法は、所謂原始農業の再現であつた。

ここで、レンバン島における食糧事情について大略を書かねばならない。食糧は英軍から支給されるもの以外、自分達で作つたもの他は、食べ物といえる物はこの島には何も無かつた。先ずレーションである。これはアメリカ軍の携帯口糧のことで、これにパンヒックレーション、コンポレーションの二種があつた。三食分が平たいアルミ缶三つに入っている。一組一人一日分である。これには、ビスケット、コンビーフ、コンデンスミルク、チューインガム、ちり紙、煙草まで入っている。コンポレーションはインデアン用だという。長方形の立罐に、三食分が三袋にして入っている。総的に質は劣るが量が多い。

次にアタコであるが、これはアタコなのか、アタ粉なのかよくわからない。タビオカ芋を乾燥して粉にしたものへ稗やデントコーンの粉を混ぜたもののように

ある。これを水に薄くといて平鍋で煮ると糊状になる。これをすすする。米は飯に炊く程の量ではない。何が一番良かったかとなると大豆であった。小粒種なので、時間をかけて煮ると何倍にも量が増えた。レーションが最高なのだが、配分される量が問題であった。良くて二分の一定量、大方三分の一定量である。三分の一定量というのは、一日分を三日で食べろということである。これは支給されると直ちに各人へ分配した。一個所に置いておくと盗難のおそれがあるからだ。この配分が仇をなす。

何しろ甘い物ばかりである。三食分を一回に食べたとしても胃袋が苦情を言う量ではない。飽くなき食欲の誘惑に抗しかね、定量を守らずに食べてしまう。十日分として支給されたのを五日で食べてしまつては、後の五日は水ばかりということになる。米は一日一合五勺位であつたらう。これを三回に分けて食べるには、朝は米のとき水に塩味をつけて飲む。昼は米粒が浮いている重湯。このようにしても夕食は箸では食えないお粥にしかならない。しかも副食は何もない。その上、

これらの食糧は同時に支給されるのではない。それぞれ十日分、二十日分として支給されたのである。

開墾は遅々として進まなくなった。栄養失調で動けない兵隊が続出したからである。百十余名の中隊で、どうにか作業に出られるのは三十名位になつてしまつた。

レンバン島の壤土は肥沃ではない。作物を栽培するには肥料が必要である。化学肥料などがある筈はない。人糞尿が欲しいのだが、製造元がろくに食つていないのだから出る物が出ない。これは先ずのぞみがない。幸いに海岸が近いので海星（ひとで）と穂飯（ほんだわら）が十分にあつた。これを積み重ねて置くすとすぐ腐り、良質の肥料になつた。三か月もするとタピオカも甘藷も肥えてきた。これで何時支給食糧を止められても餓死することはあるまい。私達の栄養も次第に改善されて来た。

因みに、海が近いなら魚や海草がとれたのではないかと思われるかも知れないが、たとえ漁撈具があつたとしても、ここの海には食えるような魚はほとんどい

ない。肥料に十分な海星と穂俵はとても食べたものではない。とにもかくにも私は、農耕係将校として何とかその責を果たすことが出来た。

四月中頃になると、復員の情報が乱れ飛んだ。兵隊達は浮足立ってしまった、少しも農耕に身が入らなくなってしまった。五月三日、やっと乙守部隊に宝港集結の命が下った。宝港は復員船の出る港であった。ところが不運にも我が中隊は、第二中隊と共に、宝港貨物廠の下宮作業隊と交替を命ぜられた。兵隊達をなだめるには大いに苦労したが、その後約一か月、貨物廠への食糧の陸揚げ作業に従事し、十分な食糧を与えられたお陰で、またたく間に体力が回復し、丸々と肥ってきた。ここでの最後の使役はかえって良い思い出となった。

六月十四日、待ちに待った復員船。リバテ型「ジョンカレット号」に乗船した。そして昭和二十一年六月二十九日、宇品港上陸。同日復員完結。小隊長としての権限からも、そして責務からも解放され懐かしの故郷へ向かった。

前年の八月十八日、スнгеーパターニーの病院で敗戦を知ってからやがて一年になろうとしていた。

レンバン島追想

新潟県 星野辰司

私は昭和十一年徴集第二補充兵であった。

昭和十八年七月一日召集・入隊（二十七歳）、十一月三日バンコク上陸、明治節として祝酒を戴いた。忠誠を書い戦友と前途を祝った。

マレー作戦後の平穩らしい各地に警備。

昭和二十年一月頃、私の所属部隊の系列は次のとおりである。

南方総軍（威） 寺内大将―仏印サイゴン

第七方面軍（岡） 板垣大将

昭南第二十九軍（定） 石黒中将―タイピン

第九十四師団（威烈） 井上中将―スнгеパターニ

私は、師団司令部参謀部電報班（暗号班）に勤務し